

福鼠寶山入

この御伽草子は、十返舎一九のものせしにて、文化酉どしの板なり、ことし八十になれる父のいとけなかりしをり。人よりたまはりて、もたりしを、さる宿世やありけむ、家の火災にかゝりしをりにも焼けのこり、水災のをりにさへその災をのがれて、親族の子共が行きぬたることもあり、轉々多くの手をへて、我が幼時のもてあそび草となりしものなり、同じやうなるが五六巻ばかりあれど、金太郎桃太郎の巻などは、かのれ夏の日の水遊にもちいでなどしけるをり、いたく損ひやぶりたれば、今は其の筋をだにたどるによしなし、たゞ此の一篇は其の中のや、全きものにて、文字も繪も白鼠さだかなれど、もと月曆がゑがきし繪本にて、詞はそのときわかしたるを、かく其の繪をはつか鼠はつかにあぐることゝなりては、詞をも省きたるあり、従ひてその興味も十の一になりにたり、されど、此度何をがなとの御ちう文のまに、猫の爪かく傳はりしといふをかごとにて、凱旋の御祝かた、世の幼き方にまゐらせんとて、さながら送りまゐらす、何のことゝしう、いらぬちよつかひを、と人の見とがめ給はんも、そは猫の目も、とまれかくまれとてなむ、

むかしく、大黒天王甲子の年、家内に野良猫住みて數多の他の
野良猫どもをかたらひ、手下となし、屋根裏天井を徘徊して、鼠
をとりなやますこと夥しければ、大黒天王の仰をうけ、棚元糊舐
公源頼光といふ白鼠、家臣、綿上砂、渡邊綱、酒樽、枳坂、田金時、裏壁
崩竹、占部、季武、白杵がたつき、白井定道を集め、猫退治を評議する、
(おたつき)ゆふべも見ますれば、しぼりの浴衣で、蛇の目の傘をさして
猫じやくといつて、あるきました。

(くえたり)臺所へいつて、何ぞちつとひいてござれ、すこし腹がさみし
くなつた。

(秘)お互に、子共を澤山もつてをるから、心づかひでなりませぬ。
棚元糊舐公の姫君、夜ふかく餅花の花ざかりに、腰元あまた引連れ

て、出かかけける
 所に、かの猫が手
 下の野良猫ども、
 これを見つけて
 「親方の所へひつ
 ぱらへ」といふ程
 こそあれ、やに
 ほに、姫のうち
 のりたる枕の乗
 物を奪ひとり「エ
 イかごくヤツ



チヤイコレハイ
 サ」とひつかつぎ
 て、にげいだし
 けり、
 (供侍の鼠ねずみとる猫爪ねこつめ
 をかくす、との
 たとへの通り、
 油断ゆだんは大敵たいてき、
 エ、残念げんぜんな、
 あとの一抔ひとつかを
 飲のまなんだら、

よかつたものを、脚がひよろついで、かなはぬく。

又其の頃、臺所の竈の中に、おなじ手下の虎班の猫住みて、往來の鼠をなやまし、其の上竈の中を小便だらけにする故、糊舐公、綿上砂をめされ、小便無用の札を立て、歸るべし、との事なりけり。

(細なめ公) ちよイトひつかゝれぬやう、此の札を立て、早く逃げて戻るがよい。

(砂) さやう致しませう、ひよつと私が猫にとられましたら、かゝあめを後家に致すが、残念でござります。

さて、砂はその札を竈の灰の中におしたて、歸らんとする所に、竈の中より、さもおそろしき虎猫ぬつといで、ちよツかひをいたして、鼠をひつつかむ、砂その手とりてきりはらひ、ちよツかひ

をもちてかへる。

虎猫は俄に不自由になり、仲間には「手のない奴だ」と笑はるゝを悔しがり、何とぞちよツかひを取りかへさんと、綿上の伯母になりて、綿上の邸にきたり、猫のちよツかひを見たきよし望みける故、綿上出だして見すれば、そのまゝとつてひねくりまはし、「ちよつくらちよツかひ、これをもつておいとま申す」とそのまゝかけたし、一目散ににげて行く。

糊舐公之をきこしめして、残念におぼしめし、やがて四天王の鼠どもと相談あつて、大屋根にすむ野良猫はじめ、手下の猫ども残らずうち滅さんと、各姿をやつし、はりをつたひ、棚をよちのぼりて、大屋根さして赴きける。

(甲鼠) 煤だらけで、すべるはく、これく節穴がある、氣をつけさ
つし、けがをするぞ。

(乙鼠) しつかりと頼むぞ、よいかく、

(丙鼠) これへとツつらまつてきさッし、おッちると、水がめの中
だ、しつかりさつせへ。

道すがら、大黒天王のおはします神棚へ参りて、またゝびをさづ
かり、これにて猫をうちとるべしとの御つけなるゆゑ、みなく
喜び、やがて窓より廂へかゝりけるに、若き女鼠の、着物を樋竹
の流れにて洗濯せるがあり、これに様子をきゝて案内せさす。

(すな) 野良猫のすみかは、かすかにみゆる大屋根の上だな、よし、
此の女鼠も、野良猫にとらはれとなりたるにて、此のてあひの話を

聞き、大きに喜び、やがて大やねの猫の住處へ案内してつれゆく、

(女鼠)むかうでござ

ります。

(すな)ものほしに野

良猫ども、日

なたぼこして

ゐる、あそ

こたく、

(くえたけ)どれもく*

り、爰に一宿し、またゝたびを酒にいられて、野良猫にすゝめけれ

ば、喜びて大あはびの貝にて酒盛をはじめ、眷族どもみなくたべ



八

* くらひふとつ

て居るな、

(物干の猫)ア、鼠くさ

いく、

かくて、四天王

の鼠ども、大屋

根に至り、旅の

修行者なりと詐

惹ひて、しやれちら
 しける、しかる處
 また、びを入れたる
 さけをたらふく飲
 たることなれば、皆
 ヲたわいなくなりて、
 目をとろくとし、
 涎をながして、餘念
 なきところを見すま
 し、皆々仕度して、
 遂に猫どもを退治け



り

(野良猫) エ、無念々々、

にやんまみだぶつ

く、

(鼠甲) こいつ皮をひつば

いだら、三味線の

ひとつもはれやう、

(鼠乙) おのれ思ひしつた

か、にやんとでも

いつて見ろ、

(鼠丙) ねこといはずと観

念ねんしろ、

かく思おものまゝに野良猫のらねこそのほか眷族けんぞくども残のこらず退治たいぢして、其その首くびを車くるまに載のせて、もちかへりけり、これよりして家内かだい穩まかになり、大黒天王だいこくてんわうの御威光ごゐこうあらはれ、白鼠しろねずみども豊ゆたかにまもりて、その家榮いさかえけり。

されば、白鼠しろねずみども、この年としふりし野良猫のらねこをやすくと退治たいぢしたりしも、「大黒天だいこくてんの御ごかけ天祐てんゆうのいたす處ところ」と御禮ごれいまゐりに行き、おみきおそなへをあけて、御禮ごれいを申まう上げけり、

〔大黒天だいこくてん〕これからも、猫ねこがゐぬとて、ゆだんせぬやうにしやれ。